

三島付近の水害調査

著者	高島 勝
雑誌名	静岡地学
巻	28
ページ	9-9
発行年	1974-11-17
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025729

三島付近の水害調査

高 島 勝*

三島付近は昔からたびたび水害が発生し、悩まされてきたところである。

水害は地域やそれぞれの河川により特徴があるといわれるが、気象や地形、地質、河川の状況等の自然的条件や原因だけで発生するものだろうか。

三島付近の水害の発生状況や河川の状況等について調査したので、その概略を報告する。

(1) 水害の発生状況

発生回数の経年推移によると、時代とともに増加していることと、その増減に長、短の周期性が見られる。

月別発生状況は、8月下旬から9月にかけて最も多く、ついで6月中旬から7月中旬、7月下旬から8月中旬はやゝ少なく、冬、春季はほとんどない。

気象的要因としては、台風が最も多く、ついで、低気圧、梅雨前線等であるが、近年低気圧による発生が多くなる傾向がある。

水害を発生させた台風の経路は、季節と関係があるが、三島付近を通過するもの、遠くを通過しながら前線を刺激して大雨を降らすもの等数種の型がある。

(2) 河川の状況や降雨量と水害

三島付近の水害は、主として大場川水系の氾濫と、この川と合流する狩野川本流付近の氾濫である。大場川は、市の平野部の東側を箱根山麓に沿って、ほぼ北から南へ流れているが、その流域の大部分が箱根山西麓で、流路が10 km前後の数本の支川流により形づくられている。したがって、大場川流域の水害は、箱根山の降雨量と関係が大きい。

19年間(昭和5年～23年)の資料によると、水害時における三島に対する箱根山(海ノ平)の降雨量の比は、およそ1.0～2.0であり、箱根山の日降雨量が50 mmをこえると水害が発生することがあった。100 mmをこえると極度に多くなり、200 mmをこえると100%の発生率である。

降雨量の表面流出率の大小は、河川の流水量を左右するが、流出率は降雨量の時間的变化に関係し水害の発生には長雨型、集中豪雨型等があるといえる。

(3) 既往の水害

水害時の状況を聴取して、水害古地図をつくった。これによると、それぞれの水害は必ずある特徴をもっているが、概括的には、

- ① 水害常襲地域がある。その地域は過去における河川のはたらきの結果、下流地域の方が標高は高く、背後地域からの流水の排出には、不適当な沖積低平地の盆地底地形のところであり、もう一つは、河川の蛇行部や河岸段丘崖内の低地である。
- ② 箱根山西麓は開墾畑が多い傾斜地であるため、水の涵養に乏しく、また、支川流が短いので流出量が多く、大雨時には流水速度が極度に大きくなり、破壊力が急増するため、山間部では崩れや流失を生じやすい。特に谷間水田は、自然流下による直接取水なので、その流域による被害を受けやすい。
- ③ 最近の水害の状況は、以前に比べて変化している。これは山麓の各所の丘陵部や平野部で行なわれてきた大規模な宅地造成等による、流域の自然的、社会的、人為的、利用形態の変化が、河道の負担を大きくしたためであると考えられる。

* 三島市立中郷中学校